

去勢手術と避妊手術

去勢手術や避妊手術は、子供を作らないことを第一の目的として行われます。現在では、性ホルモン剤の投与やインプラントで、その目的を達することも可能になりましたが、その効果の持続が短いこと、副作用が強いことから、1)現時点での繁殖は行わず、近い将来に繁殖予定がある、2)皮膚疾患や内分泌疾患、子宮蓄膿症、前立腺肥大症、腫瘍等の治療の為～などの特殊な例を除いて、危険が伴うため行わない方がよいと考えられています。また、止むを得ず実施する場合も、細心の注意が必要です。

また、これらの手術は、決して1)発情を起こさない、2)発情行動・問題行動を阻止する～ためだけに行われるわけではありません。他には、3)性ホルモン由来の疾患の予防・治療、4)発情の負担・性ホルモンの悪影響から引き起こされる精神疾患の予防・治療等があります。一般的に、これらの手術は疾患であれば止むを得ないわけですが、大部分は健康体に手術を行うのですから、飼い主さんが嫌う場合も少なくありません。逆に、安易に考えたり、「とりあえずやっておけば」という考え方であったり、体調を考えずに行われたり、不適切な実施により不幸な結果になるということもあります。

発情が起こること、これは生きている動物では当たり前のことです。特に、動物は本能的に種族を繁栄させる為に、性衝動が強く出るように身体の機構が出来ています。よく、「動物は自然が一番」といって、「発情が起こるままにした方がよい」、人のエゴで手術するのは、むしろ「動物がかわいそうだ」と議論されることがあります。確かに一理ありますが、これはあくまで野生動物、ないしは動物だけの世界で生きる動物たちにしか当てはまりません。これには重大な落とし穴、ないしは考え違いがあるのです。なぜなら、この考え方と言うと、まず動物を「人が飼うこと」、ましてや「都会で飼うこと」これ自体動物にとっては不自然だと言わなければなりません。

しかし、犬や猫は、人と共存する事を自然として受け入れた動物で、数千年人と共存した歴史があります。ですから、人と生きてこそ「犬や猫にとっての自然である」ということを忘れないで下さい。犬や猫に、人の作った「明らかに不自然な自然」を押し付けるのではなく、何が人と動物の関係で必要・重要なのか、これをよく考えなければいけません。

あくまでこれはお互いの約束を守って成り立つものです。人は、動物の暮らしやすい環境の整備や理解・しつけ・倫理の向上に努力をし、動物は、自分だけでなく人の社会で生きていくように順応します。その結果、お互いに純粋な愛情のやり取りや癒し・家族を得ることが出来、さらに動物は保護されることで生命を守ることが出来ます。皆さんが、人と動物のルールを守って、適切な環境で、愛情を持って、動物に対しての考え方やモラルを進歩させて、そして医療の進歩があり、年々犬や猫の寿命は延びているのです。

去勢手術・避妊手術の大きな目的あるいは考え方は、

- 1) 発情の度に交配・妊娠・出産するのが自然と考えるならば、これをさせずにいることは不自然です。発情は、それだけでも雄・雌共に精神的・肉体的に大きな負担をかけます。発情だけ来て、それをしつけや我慢で乗り切ることは、大きな苦痛であり負担なのです。子供を作らない、ということよりもこの負担を軽減する事が第一の目標になります。
- 2) 人と共存する上で、不用意に犬や猫を増やす事は、害になります。ですから、子供を産まないようにする事は、やむを得ないことと考えられます。これは、人の都合ですが、不用意に繁殖することで、捨てられたり、悪い環境で飼われたりするのを防ぐ為でもあります。
- 3) 発情の度に、交配・妊娠・出産していればよいというわけでもありません。なぜなら、それぞれの行為は、感染症の感染や疾患の発症、分娩という命懸けの行動が伴うわけで、これを続けていけば身体的負担が大きくなります。この負担を軽減する為でもあるわけです。
- 4) 生殖器系の疾患が増えています(長寿になったことも関与): 乳腺腫瘍、卵巣・子宮の疾患・腫瘍、子宮蓄膿症、精巣腫瘍、前立腺疾患、会陰ヘルニア、肛門周囲腺腫など。これらの予防・治療であることも大きな目標となります。

去勢・避妊手術は、人との共存を守る事とともに、動物の身体を守るため、現時点での道徳心や動物愛護、獣医療の考え方の中で、最良の方法ひとつとされています。

手術について

1、手術には、下記の方法があります。動物の体質、性格、既往症、基礎疾患、飼育環境、容態によって、方法を選択します。

去勢手術：精巣摘出術、精嚢摘出術（疾患時）、停留精巣（皮下織内・腹腔内）摘出術

避妊手術：卵巣摘出術（健康な猫）、卵巣子宮摘出術（健康な犬、発情中・疾患時の犬・猫）

2、麻酔法は、当院では原則として「イソフルレン吸入麻酔」(別紙参照)にて実施します。

この方法は、現在の獣医療では、最善の麻酔方法として認知されています。一般的には、費用をおさえる為、処置・管理が簡便な為、注射麻酔で行われることが多いのですが、安全性に問題が生じる場合がある為、安全性を最大限に考慮して、上記の方法以外では行いません。

3、手術・麻酔の安全性を高める為、術前検査を実施することをお勧めします。医学上は、手術や麻酔を行う際には、必ず一定レベル以上の術前検査を行う事が常識です。これは、現在健康にみえても、悪影響を受けやすい機能低下や障害を見つける為、関知できていない基礎疾患の存在や予測できていない術後合併症等を予防・治療する為、最適な手術・麻酔法を決定する為です。

しかし、一般的には、去勢・避妊手術の場合、費用をおさえる為に身体検査のみで済まされることが多く、基礎疾患の存在、疾患罹患時、高齢の場合に行われます。確かに、不必要な場合が多いのですが、最善を尽くすことを目的とする為、当院では強制ではありませんが、事前にご説明いたします。

当院では、その点をふまえて、健康で若い犬や猫の場合、術前検査を行うかどうか、飼い主さんの意志にお任せしています。ただし、術前検査を実施しない場合、そのリスクを負って頂く事をご了承ください。

4、事前に混合ワクチンの接種が済んでいることが前提となります。

5、当院では、最高・最善の獣医療を提供するよう努力しています。そのため、上記事項～生命に関与する事項について、省略する事については希望されても同意いたしません。

一部病院では、安価に手術を行う為、ワクチン接種や術前検査の省略、麻酔・手術法を省略、術後管理・インフォームドコンセントの不徹底などがなされることがあります。これは、止むを得ない理由もありますが、生命の大切さは全て同じという考え方から、獣医師として行うべきではない行為と我々は考えております。

例えば、もっと簡単なことでも、回復が遅れているのに、またはその後外出するのに、当日に退院させること：術後の体温低下や嘔吐、体調不良などを悪化させたり、対処し

ないこととなります。・抜糸不用の吸収糸ないしは縫合法での手術：メリットもありますが、術創の感染や癒合不全などの副反応が出る可能性があります。

6、上記事項は、野良猫や外猫の場合も同様に考えます。

7、手術により、性格が変化することはありません。ただし、性ホルモンにより影響を受けていた性格（過剰行動や攻撃性等）が、変化することがあります。

8、手術により、肥満が起こることはありません。ただし、性行動や性周期の消失・興味の欠如、食欲への欲求等が高まる為、肥満しやすくなることはあります。これは、飼い主さんの自覚、飼育環境の整備で充分予防できます。

9、性ホルモン失調性疾患（皮膚疾患、尿失禁等）が、低率ながら起こることがあります。